

Morphological and embryological studies on the Lemnaceae. I. Amer. J. Bot. 50: 677-686. II. *ibid.* 50: 907-914. Subramanyam, K. 1962. Aquatic Angiosperms. New Delhi.

Summary

The germination of three *Lemna* species, *L. gibba*, *L. paucicostata* and *L. perpusilla*, was observed. In *L. gibba* the first root protrudes from the suspensor-hypocotyl side before the first frond appears (Fig. 1. N). In *L. paucicostata* the first root is produced on the lower side of the second frond (Fig. 1. J). Whereas, in *L. perpusilla*, in some cases the first root is produced on the lower side of the second frond as the same as that of *L. paucicostata*, but in other cases it is produced on the lower side of the third frond (Fig. 1. E). These patterns of the root formation in these species seem to indicate a relationship between them.

〇コウタケの学名 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: On *Sarcodon aspratus* (Berk.) S. ITO

コウタケ (皮茸) は我国の著名な食用菌で、その特徴は多くの日本の菌学者には正しく認識されている。申すまでもなく、本種は日本産の菌に基き、Berkeley が 1882 年に発表した種である。そして日本ではシシタケ *Sarcodon imbricatus* (Fr.) Karst. との区別点も一応明らかにされていた。後者は針葉樹林に普通に発生する種である。

ところで、日本で明らかな種類が、必ずしも外国の学者に正しく認識されているとは限らない。コウタケがそのよい例である。この類の権威者であるライデンの Maas Geesteranus 博士は、1960 年の論文¹⁾で、コウタケに当てられた *Sarcodon aspratus* は欧州にもあるシシタケと同一種で、その異形なりと断定した。1971 年出版の彼の著書²⁾ではこの見解通りに扱っている。1974 年³⁾の論文では根本的の見解は変えて居らない。しかし伊藤博士の日本菌類誌で扱っているコウタケは、*Sarcodon aspratus* には当たらないが、*S. imbricatus* とは区別出来るとした。そして鱗片の状況、香り、広葉樹生の点で *S. praestans* と同一種としている。

ここで我々が採り得る方法を考えて見る。1 つは彼の見解を無視することであるが、それでは我々の独りよがりになり、コウタケを外国の学者に正しく認識して貰えない。

-
- 1) *Persoonia* 1 (Pt. 3): 344-345 (1960).
 - 2) *Hydnaceous fungi of the eastern Old World* (1971).
 - 3) *Proceedings Koninkl. Nederl. Akad. v. Wetenschappen, Amsterdam, ser. c.* 77(5): 487 (1974), 79(3): 283-285, fig. 9, 10 (1976).

次はキューの腊葉館にある、*Hydnum aspratus* のタイプを我々の目によくしらべ、日本のコウタケの生品と比較して一致することを確かめることである。しかしその手段をとるより先にG氏と接触することになった。1974年5月にライデンに滞在中、彼の方から日本のコウタケの新しい標本を見たいかという希望が述べられた。私はこれをうけて、8月に帰国早々清水大典氏に菌の採集方を依頼した。9月に山形県吾妻山の大平で採ったコウタケ4点が氏から送られたので、早速ライデンに空輸した。1976年³⁾の論文でG氏は改めて清水氏採集の標本で代表されるコウタケは、*S. aspratus* のタイプと胞子の形まで一致し、*S. imbricatus*, *S. praestans* とは異なる種であるという見解を発表した。そして日本の生品に基いた詳しいコウタケの記載を切望すると述べている。この論文で、とくに私の注意を惹いたことが2件ある。1つはコウタケの乾燥品に強い香気があることで「刺激的な、燻蒸した、タール様臭気」と形容している。そして火熱で乾した結果であろうと結論している。香気に対する人種間の感覚の相異であり、弁解する必要はなかろう。今1つはハリタケ科などの分類は、世界的視野で行うべきものとの彼の見解である。これは私の年来の主張でもある。コウタケの特徴を重ねて挙げれば、川村清一博士著菌類図説(1929)に載っている彩色写真に代表されるように、広葉樹林生、漏斗状、その開孔部は柄の底部まで達し、鱗片は角形でなく、粗く顕著、針は柄の下部まであり、乾燥品は香気が強い……以上である。因みに、清水氏採集の標本の一半は科学博物館に納める。

この機会にG氏の業績を紹介する。氏は非常に日本びいきで、かつてライデンに保管されている、シーボルトが日本で採集した地衣の研究を日本の学者に委ね、その結果、朝比奈博士の研究成果が実った。ライデン・ハーバリウムでは菌類主任の Donk 博士が1971年に急逝されるとともに、そのあとを継ぎ、分類のむずかしいハリタケ類(Auriscalpiaceae, Bankeraceae, Corticiaceae, Hydnaceae, Thelephoraceae)の研究を続け、多くの成果を発表した。1975年に定年で退職した。このハーバリウムには日本でもよく知られている van Steenis 博士のように、退職後もここに研究室を持って研究を続けている学者も居るので、私はG氏に素直に退職後の研究について考えを尋ねた。彼は直ちに研究は止めると答えた。その後キューのイギリス菌学者は、何かの機会にG氏を評して、彼は鉱物に興味を持って居るので、職から離れたら、その方面で新しい研究をはじめると思うと云っていた。彼の最近の出版物に次のものがある。異色の体系でまとめており自ら画いた色彩図も多い。英文、独文を混えて記述してある。

R. A. Maas Geesteranus: The terrestrial hydnumus of Europe. 127 pp. 40 col. plates. North Holland Publishing Co., Amsterdam, 1975. Dfl. 85.00.

(国立科学博物館)